

映画で学ぶシリーズ5

「映画のなかの映画」Part 2」

— 日本・欧米のかくれた名作

コーディネーター
青地伯水(京都府立大学教授)



「映画のなかの映画」は映画に見られる多様な影響関係を意味するとともに、「とくに優れた映画」を探求するということです。

日時

**2026年12月19日、26日、
2027年1月16日、23日**

の土曜日4回 各回13:20-15:50

場所

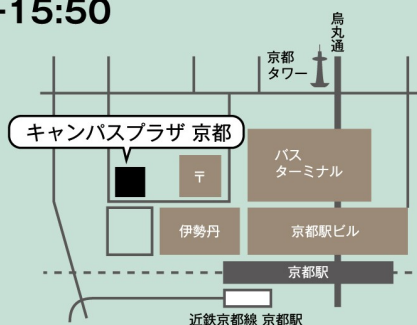
キャンパスプラザ京都
第3講義室
1月23日のみ第4講義室

定員

55名 先着順

受講料

4000円(4回通しのみ) ※第1回目に現金をお願いします。30分前から受け付けます。早めにお越しください。
※高校生、京都府立大学生ならびに三大学共同化科目受講生は無料(要登録)



募集期間: 2026年12月15日まで(定員に達し次第締め切ります。)

申し込み方法: 右のQRコードから

または、h_aoji@kpu.ac.jp 宛に、件名を「リカレント学習講座申し込み」として、氏名、電話番号を記載したメールをお送りください。



映画で学ぶ シリーズ5 映画のなかの映画Part 2

●————● 各講座の概要 ●————●

第1回 12月19日

吉田喜重『鏡の女たち』を
めぐるもうひとつの戦後史

青地伯水（京都府立大学文学部教授）



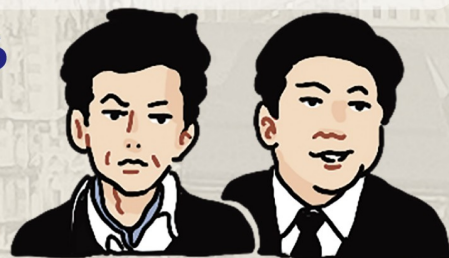
吉田喜重(1933-2022)は、『ろくでなし』(1960)から戦後の三世代の女性を描いた『鏡の女たち』(2002)に至るまで、商業主義と距離を取り二〇数本の映画を撮りました。初期の松竹ヌーベルバーグ『嵐を呼ぶ十八人』(1963)、女性を主人公とした海外ロケ『さらば夏の光』(1968)、これに吉田がリヨンで演出したオペラ『蝶々夫人』(1990)と吉田の挫折したカズオ・イシグロの小説『遠い山なみの光』(1982)の映画化をつなぐと、『鏡の女たち』の女性像が何を映してきたのかが見えてきます。吉田作品を皆さんといっしょに検証してみたいです。

第2回 12月26日

川島雄三・今村昌平作品にみる
都市へのまなざし

辻槇一郎

(京都府立大学環境科学部准教授)



ヴィム・ヴェンダース(1945-)が『東京画』(1985)で東京という都市そのものを被写体としたように、都市は様々なかたちで映画の題材となってきました。戦後の日活で活躍した川島雄三(1918-1963)、そして彼に師事した今村昌平(1926-2006)も、映画を通して都市を捉え続けた監督たちです。川島は一貫して都市に生きる「人々」を、一方の今村は都市と地方を対比的に、あるいは連続した「存在」としてカメラに収めます。川島の『洲崎パラダイス 赤信号』(1956)、今村の『神々の深き欲望』(1968)など、日本の都市をユニークな角度から捉えた2人の作品群を比較します。

第3回 1月16日

翻案者の異常なこだわり
——または、如何にしてスタンリー・
キューブリックは原作者に迎合する
ことを止めて『ロリータ』を映画化したのか

後藤篤（京都府立大学文学部准教授）



1962年に公開された『ロリータ』は、特異な映像表現を生み出す完璧主義者として有名なスタンリー・キューブリック(1928-1999)のフィルムグラフィーでも異彩を放つ一作です。中年男性のよこしまな少女愛を描いた話題のベストセラー小説を銀幕に投じるにあたり、監督はどのような狙いで独自の脚色を施したのでしょうか。映画の序盤に埋め込まれた怪物怪奇映画の一場面など、原作改変が見られる箇所を手がかりに、脚本を手掛けた原作者ウラジーミル・ナボコフとの軋轢をものとしなかったキューブリックの腹のうちを探ってみましょう。

第4回 1月23日

『ベルファスト』で描かれる映画体験
——自伝的回想と紛争の記憶

西谷茉莉子（京都府立大学文学部准教授）



『ベルファスト』(2021)は、ケネス・ブラナー(1960-)が自身の少年時代の体験を描いた作品です。物語は、北アイルランド紛争が激化していった1960年代後半のベルファストを舞台に展開します。本作は、アルフォンソ・キュアロン(1961-)の『ROMA/ローマ』(2018)、スティーヴン・スピルバーグ(1946-)の『フェイブルマンズ』(2022)などとともに、近年の自伝的映画の流行の中に位置づけられると言えるでしょう。その一方で、本作における個人的回想は、紛争を回想する行為と重なります。本講義では、監督の分身である少年バディの映画鑑賞シーンに着目しながら、映画という表現形式で紛争という「過去」を振り返ることの意味について考えます。